Museum News

絵：柳田 基

2020 展覧会

企画展
祈りの造形
2020.4.1（水）▸6.13（土）
（2020.4.9（木）～6.13（土）は新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館しました。）
2020.9.23（水）▸2021.1.22（金）
※本学学生・教職員のみ入館できます。
（2020年10月現在）

※詳細は4ページをご覧ください。

平常展
関西学院を築いた米（アメリカ）・加（カナダ）・日（日本）の人々
特集陳列
宣教師の“にっぽん”コレクション
2021.3.15（月）▸5.15（土）（予定）

カナダ・メソヂスト教会からC. J. L. ベーツとともに学院に最初に派遣された宣教師D. R. マッケンジーが日本で集めた着物と浮世絵が曾孫のA. ポール・ウィリアムズ氏（トロント大学名誉教授）から大学博物館に寄贈されました。これを記念し、寄贈品の数々を特集陳列で展示します。平常展においても宣教師の学院創立、発展への尽力を紹介します。

予期せぬ逆境のなかで

大学博物館の新体制が発足

これまでの10年間の歩み

大学博物館は、昨年、開館５周年を迎えました。2008年４月に設置され、翌年から本格的に始動した博物館開設準備室の時代を含めると、およそ10年の年月が経ったことになります。関西学院創立125周年を記念して2014年９月28日（創立記念日）に開館した大学博物館は、2016年２月には兵庫県教育委員会により「博物館相当施設」の指定を受け、本格的な博物館としての活動をその後も順調に継続してきました。

本年４月には、これまでご尽力いただいた初代館長の河上繁樹先生と、副館長として社会学やフィールドワークの観点からご協力いただいた古川彰先生が退任され、館長に加藤（美学芸術学）が、副館長に濱田琢司先生（人文地理学）が着任しました。

突然の試練が襲った2020年春

ところが、今年の春、誰もが予想もしていなかった恐ろしい事態が突然世界を襲いました。昨年11月に最初の症例が確認されて以来、いわゆる新型コロナウィルス感染症（COVID-19）はアジアから欧米へと流行が拡大し、3月11日にはWHOが「パンデミック（世界規模での流行病）」であるとの認識を表明しました。日本でも、感染者の急速な拡大のなかで４月７日の夕刻に政府が「緊急事態宣言」を発表し、兵庫県も社会教育施設に休館または自粛の要請を出します。これを受けて、企画展「祈りの造形」を１日から始めたばかりの大学博物館も４月９日から閉館となりました。

博物館の本来の使命を再確認

しかし、見方を変えて言えば、この試練は大学博物館が追求すべき使命をわたしたちに強く思い出させてくれるものでもあります。過去の歴史や文化を語り継ぐ場所として、わたしたちは、図書館（ライブラリー）と公文書館（アーカイブ）と博物館（ミュージアム）という３つの制度を持っています。関学では近くにまとまっていますが、その役割は重なり合いながらも異なっています。そして博物館の目的は、これまで河上先生が何度も繰り返されてきたように、モノに何かを語らせることにあります。

感染症と戦うためにわたしたちには、社会的な距離をとることが求められています。人と人との間で満たされる豊かなコミュニケーションが人間にとってかけがえのないものであったことを今回の経験は痛切に思い出させてくれました。そして、それは人とモノとのつながりについても同じです。閉館はモノとの距離を限りなく遠いものにしてしまいました。ほぼ半年を経て９月23日に待望の再開館がかなった今、わたしたちは、あらためて、モノに近づき、モノのそばにいることの意味を来館者と分かち合いたいと思います。

新たなる10年をめざして

将来を見据えることは、今の状況では、それほど簡単なことではありません。しかし何か特別に新しいことをする必要はなさそうです。むしろ初代館長が築き固めた基本に戻って、寄贈された所蔵品の修理と保存、さらには、それが今ここにあることの意味の新たな解明を試みるとともに、その成果を企画展と平常展で広く社会の皆様に届けていきたいと考えています。

今後とも、関西学院大学博物館をどうぞよろしくお願いいたします。

（大学博物館長　加藤哲弘）

展覧会報告 I

企画展
関西学院の 130 年

2019 年に創立 130 周年、上ケ原移転 90 周年を迎えた関西学院の歴史を紹介する企画展を開催しました。

2019.9.28（土）▶10.22（土）
9:30 ～ 16:30
※日曜日、10月12日、22日、11月4日、23日は休館。

開館日数　64日
入館者数　4,117人

キリスト教主義教育の理想

関西学院の創立

関西学院のはじまりは神戸原田の森に創立された小さなキャンパスにさかのぼります。その歴史は創立時に掲げたキリスト教主義の理念のもと、日本の近代化の紆余曲折とともに刻まれてきました。本企画展は学院の創立から現在に至るまでの歴史を大きな流れとして理解できるよう構成しました。

アメリカ・南メソヂスト監督教会の宣教師W. R. ランバスは1886年に来日しました。彼は伝道者の養成とキリスト教主義に基づく青少年教育を行うことを目的とした学園の創立を志し、1889年9月28日に関西学院を創立しました。しかし当時の日本では1890年に教育勅語が発布されるなど国家主義的風潮が高まっていました。1899年に公的教育機関における宗教教育を禁じる訓令が発布されると、関西学院のキリスト教主義の理念は岐路に立たされます。そこで学院は東京での学校運営に苦戦を強いられていたカナダ・メソヂスト教会との共同経営を決定しました。学院の運営に関して交わされた熱心な議論は、残された理事会記録からもみてとることができます。日本での伝道・教育活動への志を共にする両教会は協力体制を築き、資金や教育の体制を整え徐々に学院を発展させていきます。

神学校職員写真（1911 年）

更なる発展を目指して

新天地上ケ原へ

1918年に帝国大学以外の大学にも学位の授与を認める大学令が発布されると、関西学院でも学生会を中心に大学昇格運動が進められるようになりました。しかし第一次世界大戦後の不況から頓挫してしまいます。そこで資金調達の策として浮上したのが校地の移転でした。当時の上ケ原は木々もない更地でしたが、現在は時計台前の中央芝生に代表されるように緑の豊かなキャンパスとなりました。また移転を機に大学昇格運動の機運が再び高まり、1931年1月、ついに大学昇格が承認され、関西学院の悲願は達成されました。

新たな一歩を踏み出して間も無く、学院は再び苦難にあいます。1937年に日中戦争が勃発し、翌年には国家総動員法が発令されるなど、日本が戦時体制を確立していったのです。学院内で院長は日本人が務めるべきだとする声もあがったため、ベーツ院長は悩みながらも辞任とカナダへの帰国を決意しました。帰国挨拶状には共に過ごした日々への感謝と、学院を離れることへの悲嘆があらわされています。軍に徴用され時計台も黒く塗られるなど一変してしまった学院の様子は、疎開中の弟宛てに兄から送られた手書きの図からもうかがい知ることができました。戦後、学院は新しい学校制度のもと再出発します。1959年の創立70周年記念式典には19年ぶりにベーツが来日し、名誉博士号が贈られました。その後も大学紛争といった社会の大きな波に巻き込まれながら、学院はキリスト教主義のあり方を問われ続けてきました。宣教師たちや日本人の協力のもと繋げられてきた関西学院の130年の軌跡を、100点もの資料でふりかえる充実した展示となりました。

迷彩のほどこされた時計台（1946 年）

開催記念講演会

関西学院創立130周年記念を迎えて

会期中の11月3日(日)には、関西学院大学名誉教授神田健次氏による講演会「関西学院創立130周年記念を迎えて」が開催されました。

「瀬戸内伝道圏構想」とも呼ばれる壮大な計画に基づいた初代院長ランバスの伝道活動から、学院の基盤づくりに尽力した第4代院長ベーツまでの足跡を辿りながら、今日まで受け継がれる関西学院の理念がどのように形成されていったのかをお話しいただきました。この日は大学祭とホームカミングデーの開催日ということもあり、活気溢れるキャンパスの中で学院の歴史に思いを馳せる有意義な時間となりました。

展覧会報告 II

平常展
Go!Go! 大学博物館

特集陳列
プチ再現・
愛新覚羅家の人びと
–相依為命–

大学博物館開館５年を迎え、これまでの歩みを振り返る展覧会を開催しました。特集陳列では、開館以来もっとも来館者の多かった2015年春学期の展覧会を一部再現しました。

2020.1.6（月）▶3.21（土）
9:30～16:30
※日曜日、祝日、２月１～７日は休館。

開館日数　64日

溥傑と浩（結婚式直前）1937年

当館の活動を振り返る

“Go!Go! 大学博物館”

2014年９月28日に開館した大学博物館は、昨年度開館５周年を迎えました。当館は大学博物館としての正式なオープンを前に2008年から大学博物館開設準備室としてさまざまな寄贈資料を受け入れ、コレクションを形成しながら、その資料を整理し、展覧会を通して紹介する機会を設けてきました。

本展覧会では過去に開催した展覧会のポスターや会場風景の画像を展示して活動を振り返るとともに、展覧会のバックステージの様子や当館の主要なコレクション（蔵書票 原野コレクション、古代アンデス染織品、大阪労演資料、愛新覚羅溥傑家関係資料）の一部をご覧いただきました。「Go!Go! 大学博物館」というタイトル には、博物館へ行こうという意味と博物館はこれからも頑張りますという意志、５年の節目を祝う気持ちを込めました。

大切にしてきた展示活動

10年間の展示を振り返る

当館では開設準備室の開室以来、展覧会開催を主要な活動と位置づけてきました。博物館にとって展覧会を開催することは資料の整理や調査の動機づけともなり、その成果を館外の方々に向けて発信する重要な機会でもあります。当館では開設準備室開室の年に第１回展覧会を開催しました。当館のコレクション第１号である蔵書票の展覧会です。スタッフも初めて触れる蔵書票の世界であり、当時聖和大学（現在の聖和キャンパス）図書館で司書をされていた日本書票協会会員の西

「Go! Go! 大学博物館」展示室風景

野裕子さんに教わりながら寄贈資料の整理や調査を進めたことが思い出されます。開設準備室では2012年の秋までに全９回の企画展を開催しました。展覧会のテーマや陳列する作品の種類はさまざまで、蔵書票のほか、当館の主要コレクションである大阪労演資料や古代アンデス染織品の展示は大学博物館開館後もシリーズ化して続いています。この他にも関西学院と関連の深い具体美術運動の展示も行いました。

大学博物館開館式　2014年９月28日

開館準備のために１年間の休館を経て、大学博物館として正式に開館して以降はさらに展示の幅が広がっていきました。開館記念展示「未来への125年－関西学院のあゆみ－」を皮切りに、学院の歴史を紹介する平常展と主に館蔵品を活用して行う企画展を開催するようになり、本展覧会を含めて2019年度末までに15回の平常展と11回の企画展を開催しました。展覧会の監修や資料の借用など学内外の協力を得ながら活動を行ってきたことを改めて認識しました。

反響の大きい展示を再び

プチ再現・愛新覚羅家の人びと–相依為命–

当館では2013年10月に西宮市在住の福永嫣生さんより愛新覚羅溥傑家に関する手紙や写真、書画などの貴重な資料を受贈しました。中国・清朝最後の皇帝溥儀の実弟であり、「満洲国」軍人となった溥傑は、昭和天皇の遠縁にあたる嵯峨浩と結婚し、二女に恵まれます。嫣生さんはその次女です。寄贈いただいた資料はこれまで２回の企画展で公開しましたが、その度に多くのお問い合わせをいただき、会期終了後も再展示してほしいとのお声をいただきました。そこで大学博物館５年の活動を振り返る企画の一環として実現しました。終戦後間も無く一家が離散してから1961年５月11日に再会を果たすまで一家を繋いだ手紙や一家の活動について写真を交え、2015年開催の展覧会の一部を再現展示しました。

「プチ再現・愛新覚羅家の人びと－相依為命－」展示室風景

開催中の展覧会

祈りの造形

2020年4月1日（水）～ 6月13日（土）
※休館：日曜日、祝日
（4月９日(木)～ 6月13日（土）は新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館）

2020年9月23日（水）～ 2021年1月22日（金）
※休館：土曜日、日曜日、祝日、9月28日（月）、12月24日(木) ～ 1月5日（火）
※本学学生・教職員のみ入館可（2020年10月現在）

大学博物館では、新入生をはじめキリスト教にあまり馴染みのない方、初めて触れる方を対象に、美術という視点からキリスト教の世界を紹介する企画展「祈りの造形」を開催します。

キリスト教の聖典が旧約聖書と新約聖書の二つの聖書であることはよく知られていますが、これらは長い時間をかけてさまざまな執筆者によって書かれた文書を集めたものです。旧約聖書では古代（紀元前）のユダヤ民族の物語が綴られ、新約聖書で語られるイエスの生涯と死と復活は紀元前４年頃から紀元30年頃の話であるとされています。これらを時代や地域を隔てた遠い国の物語と敬遠するのではなく、より身近な存在として感じていただくため、ものがたり、うた、こころの造形という三つの視点から作品を紹介します。

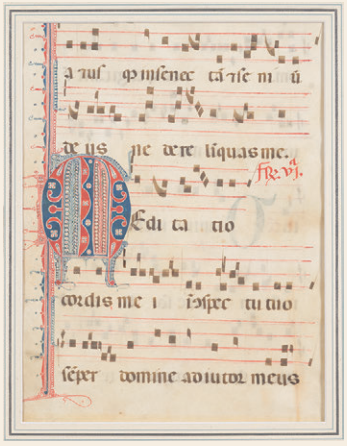
Ⅰ. ものがたりの造形

聖書の物語を題材に制作を続けた型染版画家、故 渡辺禎雄の作品を通して聖書の物語を辿ります。

渡辺禎雄《ペンテコステ》1968 年

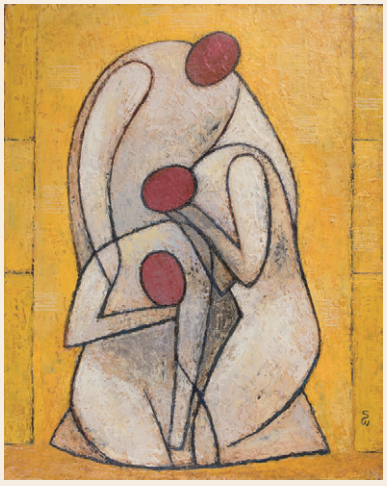
Ⅱ. うたの造形

キリスト教の教会で歌われる讃美歌や聖歌にまつわる作品や楽譜を紹介します。


グレゴリオ聖歌手写譜

Ⅲ. こころの造形

聖書の物語や登場人物をつうじて人間の存在をみつめる作家たちの作品を紹介します。
単純なフォルムと美しい色彩によって信仰の姿を描く渡辺総一や聖書の登場人物の感情表現をテーマに制作してきた竹内一など作品に表現される人間の弱さや感情の動く瞬間を感じてください。


渡辺総一《泣く人と共に》2011 年

竹内一
《浸透音－受胎告知の時に－ Luca Ⅰ 26 ～ 38》
2015 年

関西学院大学博物館通信 第９号
KGU MUSEUM NEWS No.9
2020.10.15
関西学院大学博物館
〒 662-8501
西宮市上ケ原一番町 1-155
TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6462
URL http://museum.kwansei.ac.jp/